

俳句往来

梅津 大八

▽「稲」3月号

餅を搗く前に一口白の米 山田真砂年

よく蒸かしたもち米を臼に移したその時、ちよいと摘まむ。すでにもちもちなのだが、おいしい餅になるがゆえに先に食べてみたい心理があるのかもしれない。誰もがわかるあの瞬間である。作者は長野へ餅つきの「吟行？」へ行かれたとのことだから、まさに実景なのである。

長生きの合間にりんごジャム作り 今村 博子

長生きの悠々自適のあいだに何を挟み込むかだ。不安の尽きぬ高齢であるが、まだまだ人生続きそうであり、今度は何をしようかと言う余裕を感じてしまう。屋敷がなんかを入れている方もいたように思う。高齢を肯う、である。

走り蕎麦きれいな風の吹く信濃 小島戸 実

「俳人は何かと言えばみちのくである」と誰かが言ったが、同じく信濃も、である。「紫陽花に秋冷いたる信濃かな」(久女)とか。そんなこと思いながら、新そば

の句を味わった。きれいな風、逆に言えば何もない、蕎麦しか育たない所だったのだ。それに感謝である。

針穴の見えて通らぬ師走かな 中村 晃也

親が子どもに針の糸通しを頼んでいたが、そんな親と同じ年にいつかなくなってしまった。小さな穴から確かに向こう側が見えているのだが、いざ糸を向けると通らない。そんなはずはない、と思っているからこそ、焦りも出てくる師走である。

▽「濃美」3月号

人間を忘れに来たる枯野かな 渡辺 純枝

枯野：草の枯れた野。寂しさの中に華やきも、と歳時記にある。人間を忘れるのは目的だったのか、いや枯野の実感が言わせた言葉ではないか。喧騒を離れ人間を忘れられる所だった。そしてまた、人間が消えて行くことをも知らしめ思わせてくれるものだったのかもしれない。

パンジーを植ゑて二人の軒明り 梅田 展子

新しい家族、新婚？の出発のような句。きれいだねとチョイと声を掛けられそうである。パンジーは賑やかながらそんなに出しやばらない庶民的な明るさがある。我が家の庭先にもあるが、こちらは古い二人に丁度良い明るさである。